

第7回軽金属学会功労賞

軽金属学会功労賞は、永年にわたり軽金属学の発展ならびに当会の活動に顕著な貢献をした者に贈られる。軽金属学会功労賞選考委員会（委員長 佐藤薫郷）の審査を経て平成17年2月24日（木）に開催された第66回理事会において慎重審議の結果、以下の3名の授賞を決定、社団法人軽金属学会第108回春期大会第1日目の5月14日（土）に豊橋技術科学大学において表彰式を挙行了た。

受賞者 藤本日出男 君 神鋼真岡総合サービス株式会社 受託研究部長 昭和22年7月7日生（57才）

受賞理由



藤本日出男君は、永年にわたってアルミニウム合金の表面処理技術の研究に携わってきた。特に、自動車熱交換器用アルミニウム合金の開発において、クラッド構成各部材の電位バランスに重点を置いた材料設計により耐食性を大幅に向上させる手法を考案した。また、ろう付け時の熱拡散を活用して高強度化させた高強度ラジエータチューブ材の開発では小山田記念賞を受賞している。そのほかにも自動車パネル材の糸錆性の向上を目的とした亜鉛めっき処理アルミニウム材の開発を行い、自動車パネルのアルミニウム化促進に貢献している。

また、学会活動においては、永年にわたって大会での講演や座長、表面処理部会防食分科会など各種委員会の委員、主査を務め、学会運営に尽くすとともに学会活動を通じて腐食防食に携わる若手研究員の指導とネットワーク作りには大きな役割を果たしてきた。

これらの業績が極めて顕著であると認め、ここに第7回軽金属学会功労賞を贈る。

受賞者 林 勝三 君 旭テック株式会社 専務執行役 昭和18年12月8日生（61才）

受賞理由



林 勝三君は、旭テック株式会社に入社以来、永年にわたり一貫してアルミニウム合金およびマグネシウム合金の研究開発および生産技術の統括に関連する職務に従事してきた。なかでも、トラックや乗用車部品などのアルミニウム化に関し、適した鋳造プロセスと部品構造を独自の発想によって提案し、自動車産業へのアルミニウム材料の実用化拡大を積極的に進めるなど、軽金属分野の工業的発展に多大な貢献をした。具体的には、鋳鉄製トラック用トランスミッションケースを高圧ダイカスト製に（日本アルミニウム協会 協会賞）、鋼板製乗用車用クロスメンバーをアルミニウム重力鋳造法に（軽金属学会 小山田記念賞）に代替することにより、約40%の軽量化を達成した開発事例が特筆される。こうした職務を通じて、社内の技術開発および若手技術者の育成にも多大な功績を挙げた。

一方、軽金属学会の活動に対しては、1998年から現在に至るまで東海支部の理事および監事として、軽金属技術者の育成のための講演会や研究発表会など支部行事の企画・実行や、支部の運営および会計の監査などに携わり、東海支部の活性化と発展に尽力し、通じて軽金属学会全体の発展にも貢献した。

これらの業績が極めて顕著であると認め、ここに第7回軽金属学会功労賞を贈る。

受賞者 吉岡茂喜 君 三協アルミニウム工業株式会社 技術開発本部副理事 昭和21年9月16日生（58才）

受賞理由



吉岡茂喜君は、三協アルミニウム工業株式会社で30年余にわたって一貫してビル用・住宅用およびエクステリア用アルミニウム建材、アルミニウム製家庭用品にかかわる材料、表面処理、成形加工の研究に携わるとともに、製造技術、商品技術の指導と統括業務に従事し、技術士（金属部門／総合技術監理部門）として技術開発の推進および後継者の育成に尽力した。特に、縦吊式表面処理による直流電解着色法の実用化は、アルミニウム着色材の量産化技術として注目される。

1987年から2002年の間、十数年にわたって軽金属学会北陸支部の幹事として、支部行事の企画や運営に携わり、支部運営の効率化に多大の寄与をした。さらに若手研究者の育成のための春・秋の研究発表会の開催や支部会員の相互交流企画の立案、毎年の研修見学会開催実行など支部の活性化と発展に尽力した。その功績で2001年に北陸支部功績賞を授与されている。また、評議員、高橋記念賞選考委員や全国大会の実行委員を務めるなど、永年にわたって軽金属学会の活動に参画し本会の発展に大きな貢献をした。

これらの業績が極めて顕著であると認め、ここに第7回軽金属学会功労賞を贈る。